

【『琅』三十八号・あとがき】

新型コロナウイルスの拡散が深刻に話題にされ始めた令和二年三月上旬、一年がかりで取り組んできた仏語版「ベスト」を読み終えた。読んだといっても翻訳を横に置きながらだったので、自力で読み通した訳ではない。

この作品は、昨年、通っている語学学校の授業で取り上げられ、その冒頭部分のコピーが配られたのだが、受講生が集まらず、授業は一回だけで閉講になってしまったのだった。配付された冒頭の部分に興味を覚えたので、先を読んでもよいと、飯田橋の仏語書籍専門店まで出かけて仏語版を手に入れたのである。本の裏表紙に、十九年二月十四日購入のメモがある。三百頁ほどの分量なので、一日一頁弱の速さ（遅さ！）で読んできたことになる。

学生時代に翻訳で読んで、勇気づけられるような感動を覚えたことが微かに記憶に残っていたのだが、再読して、結末が何とも不気味なことが気になった。主人公で語り手の医師リウーが、ベストが終息して、歓喜に浮かれる群衆の声を遠くに聞きながら、こんな風に述懐しているのである。

「……リウーは、この喜悅が常に脅かされていくことを思い出しつづける。（中略）ベスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、十数年の間、家具や下着類のなかに眠りつつ生存することができ、（中略）いつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ベストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうと（後略）」（新潮文庫）

間もなく「ベスト」を読み終えようという頃、東京オリピック・パラリンピック開催の有無が話題になっていた。本誌が刊行される頃には、結論が出ているだろうから、「後出しジャンケン」と思われてしまうが、筆者は一月以上も前から、開催は無理、たとえ日本が良くても外国から

選手や観客が来られなくなると、身近な人には言ってきた。

当時、組織委員会の理事が「一、二年延期」を話題にしたとき、組織委員会の会長や都知事が、予定通りに開催すべし、中止や延期はあり得ないといった主旨の反論を展開していたことは記憶に新しい。ところが、内部でどのようなやり取りがあったかは知らないが、どこかの鶴の一声であつさり一年延期が決まってしまった。他の意見に耳を傾けようとしないうち組織も怖いが、その組織が誰かの一声でコロリと前言を翻すというのも同じように怖い。

組織の長たる者は、常に最悪の事態を想定し、それに備えるべしと言われる。旗を振って、人々を鼓舞することも、ときには必要だろうが、それだけでは人々はついては行かない。ことが計画通りに進まなかった場合を想定し、そうした事態への備えを整えておくところに、信頼感が生まれるのではないか。だから、東京大会は中止になるかもしれない（多分、なるだろう）と想定して準備にかかるのが、今の時点では肝心なことではないかと考えるのである。

四月に入り、我が国でも非常事態宣言が発令された。欧米での感染者及び死者の数は、我が国とは桁違い様相を呈している。世界中の町が「幸福な都市」に指定されてしまったような観がある。

（茂治）

（次号原稿締め切り日） 二〇二〇年九月末日

『琅』三十八号 二〇二〇年四月 発行

編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-1143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-119

「琅の会」・TEL(042-773-1592)

印刷所 株式会社ポプルス

